

## 2019年1月NHK四国地方放送番組審議会

1月のNHK四国地方放送番組審議会は、21日(月)、NHK松山放送局において、11人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず事前に視聴してもらった四国らしんばん「よみがえれ“みかんの谷”～豪雨から半年の記録～」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った後、1月の番組編成、放送番組モニター報告および視聴者意向についてそれぞれ説明があり、会議を終了した。

### (出席委員)

委員長	高橋 祐二	(三浦工業代表取締役会長)
副委員長	松島 裕彦	(四国旅客鉄道監査役)
委員	神田 優	(NPO法人黒潮実感センター センター長)
	菊地 秀明	(愛媛たいき農業協同組合 代表理事組合長)
	黒笹 慈幾	(南国生活技術研究所代表)
	柴田 智恵	(有限会社大豊陸送代表取締役社長)
	床桜 英二	(徳島文理大学総合政策学部教授)
	土佐 礼子	(三井住友海上火災保険 陸上競技部 プレーイングアドバイザー)
	長井 基裕	(愛媛新聞社執行役員編集局長)
	滑川 里香	(一般社団法人マチのコトバ徳島 代表理事)
	西本 佳代	(香川大学 大学教育基盤センター 講師)

### (主な発言)

<四国らしんばん「よみがえれ“みかんの谷”～豪雨から半年の記録～」

(総合 1月11日(金)放送) について>

- 7月の西日本豪雨で愛媛県は大きな被害を受けた。愛媛みかん発祥の地として知られ、被害も大きかった宇和島市吉田町奥白井谷地区に密着していた。みかん農家を中心とする住民たちの戸惑いや、未来に向けて歩みだす姿をしっかりと描いていたと思う。首藤奈知子アナウンサーのナレーションや、現地でのインタビュー姿に好感を持った。五代目のみかん農家である宮本一成さんの紹介が特に印象に残った。少しでも品質のよいみかんを栽培しようとする姿がよく映し出されており、農家としてのプラ

イドや責任など、生き方がしっかり伝わってきてよかった。一方、若手農家の谷本修平さんの紹介は、心の動きの掘り下げがやや不十分に感じた。一時はこの地域を離れようと思ったものの、住み慣れた場所に残ることを決めた宮本好さんの心境の変化についても、もう少し深く描いてほしかった。とてもいい内容だったが、もっとテーマを絞って深掘りするとよりよい番組になったと思う。

○ 土砂災害から数日後の様子が撮影されており、それ以降もこの地区に密着していた。同じ地域を繰り返し撮影していたことで、住民たちが変わっていく様子が時系列で分かりやすく伝わってきた。この半年間で住民たちはそれぞれ大きな決断をしている。その決断に至るまでの気持ちの変化に迫り、しっかり伝えていたことは意義深い。丁寧な取材が感じられ、感心した。一方で、番組タイトルの「よみがえれ」ということばには違和感を持った。住民たちが置かれた状況や、心の動きを鑑みても、よみがえることを正解として扱うのは難しいと感じた。それぞれが苦渋の決断をしているため、このことばがどういう意図で使われ、誰に向けたものなのか疑問に感じた。地元住民の意向というよりも、周囲の期待のように見えてしまい、半年の記録をつづった番組のタイトルとしてふさわしいとは思えなかった。最後に扱っていた農地の基盤整備の話題も、住民たちの意見が簡単にまとまるような問題ではないだろう。住民たちが揺れ動く姿そのものに焦点を絞った番組も期待している。

○ みかん畑が土砂崩れによって根こそぎ流されていく様子に心が痛んだ。日常生活が奪われてしまった中、みかん農家や住民たちの気持ちがこの半年間でどのように変化していったのか、丁寧に取材されていた。災害から数日後の「もう地獄ですよ」という住民のことばからは、当時の絶望的な状況がひしひしと伝わってきた。地形的な理由もあり、なかなか復旧が進まないことに対する住民たちのもどかしさもよく伝わってきた。住民たちに寄り添う首藤アナウンサーの姿やまなざしが印象的だった。厳しい状況の中でもできる事をやるしかない、前向きに奮闘する一成さんの姿が印象に残った。先代から受け継いだ教えを継承することが、心の支えになっていると感じた。11月、しば犬のみなみがこの地区に戻り、住民たちの笑顔があふれた場面は温かな気持ちになった。人と人とのつながりや共助が、いかに大切かを考えさせられる番組だった。

○ 豪雨災害の直後から現在まで、この地区のみかん農家取材していた。時系列で編集されていたため、被災直後から半年後までの農家の方々の気持ちの変化がよく伝わってきた。災害直後の現地は泥や流木に消防車が埋まるなど、その激しさが生々しく伝わってきた。災害から10日経過してもこの地区にはボランティアすら入っておらず、支援から取り残される様子に心が痛んだ。あまりの被害の大きさに、住民の方

々はぼう然自失となっていた。避難所の高齢者たちが、先の見えない避難生活への不安を訴えていた。「いつまで避難所にいないといけないのか」ということばは、避難生活を強いられた人たちの共通の思いであるように感じた。復興が進まない中で、県による農地の基盤整備計画が持ち上がり、農家たちは極めて難しい選択を迫られていた。生活がままならない中で重大な選択を迫られることはかなりのストレスを伴うと感じ、心が痛んだ。復興は今後もつづくため、引き続きこの地区を取材し、発信し続けてほしい。

○ 豪雨被害を受けた小さな集落の日々を記録した番組。集落の所在地はどこかと疑問に思いながら見ていると、番組開始後しばらく経過したあとでようやく地図で紹介された。取材地については、番組の冒頭で分かりやすく示してほしい。取材日の紹介では、具体的な日付がテロップで示されているシーンもあれば示されていないシーンもあったため、見ていて混乱した。表示を統一してほしい。ぱっと見では気づかないような、きめ細やかな演出も見受けられたので、分かりやすさも意識してほしい。集落の住民たちが復興に向け取り組む姿が短い放送時間の中でよくまとめられていたと思うが、やや駆け足な感があった。好さんは1人で暮らしているが、この集落の中では決して独りぼっちではない姿が印象に残ったし、ホッとさせられた。豪雨から1年の節目などで、またこういった番組を制作してほしい。

○ やや駆け足だったものの、豪雨から半年の経過を分かりやすく編集し、うまくまとめていた。この地区の人口やみかんの栽培面積などは示されていたが、みかんの収穫量や地区面積は紹介されなかった。こういった数字の紹介があると、この地域の特徴をより理解しやすかったと思う。災害の実態を伝えるうえでは、映像の力がかなり大きいと感じた。泥流に流され積み上がった木々や倒壊した家屋の映像から、豪雨被害の悲惨さがひしひしと伝わってきた。なかなか復旧が進まず、厳しい実情を訴える男性の涙に胸を打たれた。みかんの生産を諦めかけていた谷本さんが、周囲の支えの中で前向きになっていく様子がよく伝わってきた。基盤整備については課題もあるため、今後も注視する必要がある。災害をきっかけにこの地区を離れた人がいたのか気になった。猛暑の中での復旧作業になったと思うが、その厳しさに触れていなかったのも気になった。豪雨被害が大きかった地域はほかにもあったが、なぜこの地区を取材対象としたのか知りたい。

(NHK側)

25分番組の中に、半年間撮影してきた内容をなるべく多く入れ込もうとしたため、やや詰め込みすぎてしまった感は否めない。ただ、取材してきたことをしっかり伝えたいという思いで、こういっ

た構成にした。この地区を取材対象としたのは、別の番組でこの地域に密着していた中で豪雨災害が起こり、悲惨な状況にあることを知ったことがきっかけだ。「よみがえる」ということばを使用した理由については、番組でも触れたように、この集落自体が消滅してしまうという危機感を住民たちが抱いていたため。せめてみかん栽培だけでもできるようになってほしいという、地元の方々を含む皆の思いをこのことばに込めた。この地域について、今後も取材を継続していきたいと思っている。日付の示し方について、極力細かく伝えたいと考えていたが、なるべく内容が伝わりやすくなるよう工夫した結果、あえて統一させなかった。もう少し数値の情報がほしかったという指摘について、受け止めたい。限られた放送時間の中で入れ込むことが難しかったというのが実情だ。

(NHK側)

この地域について、今後も継続して取材を進めていきたいと思っている。「よみがえれ」ということばの使用についてだが、指摘の点をしっかり受け止めたい。地域の人たちの思いをしっかりとくみ取ることが大切にしながら、番組を制作していきたい。

○ 被災直後から半年後まで、復旧の様子がしっかり伝わってきた。住民たちの表情が、時の経過とともに変化していく様子もうまく伝えていたと思う。しば犬のみなみのエピソードからは、地域のつながりの深さがうかがい知れ、復興の原動力になっていると感じた。愛媛みかん発祥の地としての誇りや伝統も、その力になっていると感じた。こういった地域の力こそ、好さんがこの地区に残ることを決め、谷本さんが前を向くきっかけになったのだと思う。人と人とのつながりや、絆の大切さを改めて示してくれる番組になっていたと思う。農地の再編復旧計画を住民たちが話し合うシーンは、希望が持てるような紹介になっていたものの、実際は不安も大きいはずで、今後も取材を続けて伝えてほしい。また、再編復旧に伴う未収益期間の問題についても、問題提起してほしい。もう少し、この地域の地形的特性を分かりやすく伝える工夫があるとよかったと思う。また、災害後の片付けには大変な苦労があったと思うが、そういうことも紹介してほしい。

○ 急峻な斜面にみかん畑が広がっているこの地区を土石流が襲った。ドローンで撮影した映像を使うことで、この場所が地形的に土石流のリスクが高い地域であることをうまく可視化していたと思う。豪雨数日後から現在に至るまで、毎月現地を取材していることに驚いた。被災直後は絶望感でいっぱいだった住民たちが、8月には復興

に向けて前向きになり、秋にはみかん畑の再編復旧に活路を見だし、12月の収穫をへて新年に復興を決意するという、流れのある構成になっていたと思う。地域のつながりの深さと、住民たちの前向きな姿に頭が下がった。取材を重ねる中で、どのタイミングでこの地域を番組にしようと思ったのかを知りたい。この地域に残った希望の断片を拾い上げて伝えたいという、制作者の思いにあふれた番組だった。しば犬のみなみが、この地域の大きな希望の断片だということも説得力を持って伝わってきた。テレビ報道の果たすべき役割は何かということをも改めて考えたとき、災害現場に寄り添いながら希望のかけらを探しだし、それをより大きな希望につなげるというこのような番組を大いに評価したい。

○ 集落存続の危機に立たされた住民たちの当時の想いがうまく映し出されていた。災害直後から何度も現地を取材しており、地域の復旧の様子や住民たちの心の変化がよく伝わってきた。ドローンの映像がとても効果的だったと思う。災害時の映像からは、大変な被害の状況がよく分かった。この集落の誇りともいえるみかん畑の約4割が流されてしまうなど、その深刻さが伝わってきた。住民たちには愛媛みかん発祥の地としてのプライドや責任があり、それが復興への支えになっていると感じた。NHKが密着取材すること自体にも、集落の人たちを前向きにさせる効果があると感じた。基盤整備の紹介は、農家たちが苦渋の決断を迫られており、この問題の難しさが伝わってきた。この地に残ることを決めた好さんの紹介では、集落の人と人とのつながりの強さが、そういった決断をさせるのだろうと感じた。この集落が今後どう進むのかを見守りたいと感じる番組で、続編を期待したい。公共放送だからこそできる支援のあり方だと思う。

○ 災害直後から約半年間、地域の住民に寄り添って取材をしていた。ハード面の復興状況だけではなく、住民たちが前向きな気持ちになっていく様子がうまく引き出されていたことを高く評価したい。災害というものは、被災直後の状況こそ頻繁に報道されるものの、時の経過とともにその機会が減り、当事者でない人たちには忘れ去られてしまう傾向がある。しかし、大規模災害の復興は長い年月を要するものであり、被災地域の人たちの道のりは長く険しい。この番組は、改めて災害の厳しさを伝えていたことはもちろん、復興において重要なのは行政支援だけではなく、住民たちの地域への誇りや共助の精神であることが示唆されていた点が素晴らしい。四国の中山間地域に暮らす住民たちの共通課題は、急速な人口減少による地域コミュニティーの衰退と、土石流を代表とした自然災害だ。この地域の復興について、地域コミュニティーの再生と災害からの復旧という両面から、NHKとしてフォローしてほしい。それこそが、住民たちのモチベーションを高め、同様の課題に直面している人たちに気付きを与えるきっかけになると考えている。

○ 豪雨被害から半年、復興に向け元気を取り戻しつつあるこの地区の様子がしっかり取材されていた。みかん農家たちの葛藤もよく捉えていたと思う。一成さんの「無我夢中だった」ということばや、一成さんの母親の「みかんにもありがたい」ということばからは、収穫の喜びや感謝の気持ち、そしてこの半年間の重みが伝わってきた。みかん発祥の地にふさわしい行動力で収穫を迎えた姿に感服した。う余曲折あったものの、この地区に残ることを決めた好さんからは、地域を大切にしている様子がよく伝わってきた。周囲の助けを借りながら、徐々に前向きになっていく谷本さんの心境の変化をうまく捉えていた。集落の存続自体が危ぶまれる中でも、愛媛みかん発祥の地を守り続けるというみかん農家のプライドがひしひしと伝わってくる、すばらしいドキュメンタリーだった。大規模な基盤整備の課題について、もっとしっかり触れてほしかった。

(NHK側)

限られた放送時間の中で、すべてを詳しく扱うことは難しかった。猛暑の中での復旧の様子など、取材はしていたものの紹介できなかったシーンも多い。この地域の地形的特性を分かりやすく表現することに難儀した。ドローンで撮影した映像などで工夫したものの、やや伝えきれなかったと思う。指摘の点を参考にしたい。地域の人たちに寄り添いたいという信念で継続的に取材をしてきた中で、災害から半年というタイミングで番組になる機会に恵まれた。引き続き、意見を参考にしながら取材を継続したいと思う。

(NHK側)

指摘のあった基盤整備の後は、住民たちの気持ちも含めて変化があるかもしれない。そういったことも意識しながら、引き続きこの地域を見つめていきたい。

<放送番組一般について>

○ 12月18日(火)の旬感☆ゴトーチ! 「心もおなかも満腹! こんぴら参り~香川琴平町~」と、12月19日(水)の旬感☆ゴトーチ! 「お殿様気分! 栗林公園さんぽ~香川高松市~」を視聴した。金刀比羅宮と栗林公園はどちらも有名な観光名所であるため、どのように目新しさや意外性を演出するのか、期待して視聴した。金刀比羅宮の紹介では、異なる3地点から中継をしており、工夫が感じられた。栗林公園の

中継も、広範囲を移動しながらさまざまな場所を紹介していてよかった。金刀比羅宮の中継では、珍しく変わったグルメの数々に驚かされた。また、有名なスポットの紹介もあったため、地元および全国に発信する情報としてバランスが取れていた。栗林公園の中継についても、説明が分かりにくいコーナーがあったものの、内容は申し分なかったと思う。少し残念だったのは、2日間ともやや中継がぎこちなかったこと。スタジオゲストのコメントと現場のコメントが重複して聞き取れない場面や、質問と答えがかみ合っていない場面が散見された。その点を改善できると、よりよい番組になったと思う。

- 12月30日(日)に再放送されたBS1スペシャル「“悪魔の兵器”はこうして誕生した～原爆 科学者たちの心の闇～」(BS1 後 2:00～2:50、3:00～3:49)を視聴した。資料を丹念にひもとき、関係者をしっかり取材することで原爆誕生の背景に迫っており、見応えのある番組だった。エリート科学者たちが、原爆開発を提案したうえで積極的に推進し、投下も主張したという実態に驚きを禁じ得なかった。科学の発展において、道徳や倫理の視点が欠如すると絶望を生んでしまうということが示唆されていた。多額の研究費の使用など、科学者たちは世間の批判をおそれて原爆を投下したという。また、投下したあとのことを全く考えていなかった科学者もいたという。見ていて、心におりがたまっていく感じがした。
- ここ最近の駅伝や大相撲の中継で、アナウンサーの言い間違いや、主観的で好ましくないコメントが散見された。十分気をつけてほしい。
- 12月31日(月)の「第69回NHK紅白歌合戦」を視聴した。徳島からの米津玄師さんの中継がとてもよかった。学生を中心とした若い世代がテレビを見なくなってきているが、今回の紅白はそういった世代も多く視聴していたと感じており、すばらしかった。米津さんが歌唱していた美術館を訪れる人が増えたとも聞いており、NHKの番組が地方創生に貢献していると感じた。NHKホールだけで紅白を作り上げるのではなく、地域ならではの空間を活用した仕掛けによって、新たな視聴者を呼び込めることが示された紅白だったと思う。
- 「第69回NHK紅白歌合戦」を視聴した。米津さんの出演によって若い世代にも関心が高い紅白になったと感じ、とてもよかった。米津さんが生で歌うと知り、わくわくしながら視聴した。美術館での演出と米津さんの歌声は見事だった。また、サザンオールスターズがNHKホールで35年ぶりに歌ったことも番組を大いに盛り上げていたと思う。三山ひろしさんの、けん玉ギネス世界記録挑戦もおもしろかった。四国出身の歌手やアーティストにフォーカスした番組を作ることも、地元の放送局とし

て意義深いことだと考えている。

- 「第69回NHK紅白歌合戦」を視聴した。桑田佳祐さんと松任谷由実さんのコラボレーションに元気をもらった。大災害が多かった平成という時代の最後の紅白。それでも前向きに明るく年を越そうという演出や、出演者の姿勢を評価したい。どの出演者もすばらしかった。四国出身の米津さんや三山さんの活躍がとてもよかった。司会者の集中力が切れているようなシーンも散見されたため、カメラワークにもっと気を配ってほしかった。BS4K・BS8Kでの放送もあり、とても楽しめる紅白だった。
- 1月1日(火)の舞楽「納曽利」(Eテレ 前5:55~6:15)を視聴した。舞楽は日本の伝統芸能の原点と言われており、1400年以上の歴史がある。「納曽利」は、2匹の竜が舞う双竜舞であり、雄と雌の龍が仲良く遊び戯れる様子を表現しているといわれている。ゆったりと趣深く舞う様子は、華やかな衣装も相まってとても優雅な雰囲気だった。宮内庁式部職楽部の演奏もみやびで、正月にふさわしい番組だった。舞楽はふだんなかなか見ることができないため、もっと番組で取り上げてほしい。このほか、年末年始はさまざまな番組を楽しませてもらった。
- 1月1日(火)のBS1スペシャル「“衝撃の書”が語る人類の未来~サピエンス全史~」および「“衝撃の書”が語る人類の未来~ホモ・デウス~」(BS1 後9:00~9:50、10:00~10:49)を視聴した。関心を持っていたものの読めていなかった「サピエンス全史」と「ホモ・デウス」についてコンパクトに分かりやすく説明していたため、とてもお得感がある番組だった。客観的な語りになっていた点もよかったと思う。これからの時代のあり方を考えるうえで、きっかけになるような番組だった。
- BS1スペシャル「“衝撃の書”が語る人類の未来~サピエンス全史~」および「“衝撃の書”が語る人類の未来~ホモ・デウス~」を視聴した。ユヴァル・ノア・ハラリ氏の著書を読みたいという気持ちにさせられた。興味深く、いい番組だった。
- 1月3日(木)のBS1スペシャル「欲望の資本主義2019~偽りの個人主義を越えて~」を視聴した。とても刺激的で、共感できる番組だった。物事の本質をいかに捉えるかということについて考えさせられた。ネオリベリズムといえばミルトン・フリードマンだが、このテーマにも大きく関わるため、もっと詳しく取り上げてほしかった。また、この資本主義が日本の現状にどのような影響を及ぼしているのかについて、番組で扱ってほしい。

- 1月9日(水)の歴史秘話ヒストリア「東京オリンピックに懸けた男たち」を視聴した。1964年の東京五輪招致の経緯や、それに尽力した人たちの努力が分かりやすく紹介されていた。大河ドラマ「いだてん～東京オリムピック噺(ばなし)～」の主人公でもある金栗四三についてよく分かり、この番組を見たことで「いだてん」をより見たくなった。別の番組と連動するような企画はとてもいいし、2020年の東京大会に向けて楽しみが増す番組だった。
  
- 1月14日(月)のひとモノガタリ「ハカチョウの涙」(総合 後6:05～6:34)を視聴した。シリーズを通して興味深い内容が多い番組だと感じている。テーマの選定が時流を捉えているうえ、タイトルの付け方もすばらしく、視聴意欲をかきたてられた。無縁遺骨の引き取り先となる親族探しに奔走する公務員の日常を追っていた。取材相手に寄り添うことで視聴者にメッセージを届けるというこの番組のような手法が、今の時代には求められていると感じている。すばらしい内容の番組でも、そもそもチャンネルを合わせてもらえなければ視聴者に届けることはできないが、タイトルのうまさを含め、本シリーズは理想的な視聴循環を生んでいると感じた。
  
- 1月16日(水)の歴史秘話ヒストリア「ぼくはアニメの虫 手塚治虫がやりたかったこと」を視聴した。手塚治虫さんは漫画家として有名だが、実はアニメーションを作るための資金稼ぎを目的に漫画家になったという紹介があった。漫画がアニメーションを制作するための手段であったことに、とても驚かされた。手塚さんは長編テレビアニメのパイオニア的存在だが、そこでの手塚さんの工夫が、アニメ制作に必要なセル画の枚数を大幅に減らしたとのこと、とても感心した。手塚さんの工夫がなければ、今日の日本アニメの発展はなかったという紹介が印象に残った。手塚さんの人間性がよく分かる、とてもいい番組だった。

NHK松山放送局  
番組審議会事務局